言葉の“意味可能性”を探る
―言葉のイメージの多重性の観点から―

鈴木智美

キーワード　*“意味可能性”、イメージの多重性、“言葉で言い表せない”内的体験、言葉の記号性、非記号性*

1　本稿の目的と位置付け

本稿は、話者の内的体験と言葉との関わりを考えようとする鈴木（1998a，1998b，1999a，1999b，1999c）の考察の延長線上に位置付けられるものである。鈴木（1999c）では、丸山（1981，1983，1984，1993他）における「力動記号学」（丸山（1993：67））の視点を再評価し、以下のような言葉の「記号性」と「非記号性」という逆説的な二つの側面をとらえることを、話者の内的体験と言葉との関わりを包括的に考えていく際の重要な鍵になるものとして位置付けた。

即ち日常的に言葉はその言語社会の慣習に従い表現（シニフィアン）と意味（シニフィエ）との結び付きが固定化し、言語外の何らかの事物や概念を指し示しそれを“代わり”に表す「記号」（丸山（1981：119））[1]としてはたらくようになっている。しかし言葉の本質とは本来混沌とした未分節・未分化の連続体である世界を分節・カテゴリー化し[2]表現（シニフィアン）と意味（シニフィエ）との新たな結び付きを生み出そうとするものである。そのような分節とはその言語社会において慣習化される以前の流動的な動きとしてとらえられるものであり、表現（シニフィアン）と意味（シニフィエ）との結び付きもいまだ揺れ動き固定化したものとはなっていない。固定化した意味（シニフィ

---

[1] 言葉の「記号性」とはこのように言語社会における「慣習性」、表現（シニフィアン）と意味（シニフィエ）との結び付きの「固定性」、言語外の事物や概念の「指示・代行性」として特徴付けられる。

[2] 人が連続体である世界を言葉により分節しカテゴリー化することのできる能力およびその諸活動は「ランガージュ」（丸山（1981：79-80，1983：44-45））と呼ばれる。ただし言葉の本質を考える際の「カテゴリー化」とは、何らかの既存の事物や概念を分類しそれに名前のラベルを貼り付けることを意味するものではない。

エ）を持たない言葉は、それを通して言語外の特定の事物や概念を指し示すこともない。言葉とはこの意味でその本質はその「非記号性」（丸山（1981：237, 1993：17））[3] にあると言うことができる。

鈴木（1999c）では話者の内的体験と言葉との関わりを考えていくための手がかりとなるものとして、我々が時に「とても言葉で言い表せない」というある感情的色彩を伴う強い体験に遭遇することがあるということについて考えた。するとそのような体験においてなお我々はいわば“万感の思いを込めて”何らかの「言葉」を表出することがあるということに気付く。鈴木（1999c）ではそのような体験においてなお表出される言葉をたとえそれが“言葉のあや”を用いることのない見かけ上通常の言葉と変わらないものであったとしても[4]、上記のような言葉の本質的な「非記号性」を体現する言葉であるとしてとらえ直すことを試みた。即ち我々は時に、日常において既に意味の固定化してしまった言葉によっては言い表すことのできない強い感情的色彩を伴う体験に遭遇することがある。そのような時その混沌とした内的体験の世界を新たにカテゴリー化すべく言葉の本質的な分節化の動きが現れると考えるものである[5]。

そのような体験において表出される言葉には日常の言葉に見られるような慣習化そして固定化した記号的な“意味”はない。本稿ではそのような「言葉で言い表せない」体験においてなお表出される言葉に見出される、非慣習的な流動性を“意味可能性”と呼ぶこととし、その実態を言葉のイメージの多重性に

---

[3] 言葉の本質的な「非記号性」を日常における「記号性」との対比で考えると、言語社会における「非慣習性」、表現（シニフィアン）と意味（シニフィエ）との結び付きの「非固定・流動性」、そして言語外の事物や概念の「非指示・非代行性」としてとらえることができる。

[4] そのような体験においてなお表出される言葉とはいわゆる比喩的な表現や新奇な表現に限らない。例えば人との別れに際し「言葉で言い表せない」強く深い思いを体験した時に、必ずしも「灯が消えてしまうみたいだ」「空が泣いている」「私の心も一緒に持って行ってほしい」などの言葉が表出されるわけではなく、「じゃあ」「さよなら」「淋しい」などの通常の言葉が万感の思いを込めて表出される可能性も十分に考えられる。

[5] 力動記号学がその考察の対象とするのは既に構成された構造と未分節のカオスとの間の往復運動を可能にするような絶えず生成しつつあるものとしての流動性を持つ記号行為であるとされる（丸山（1993：67））。そこでは代行・再現的手段ではない真の創造行為としてのレトリックや、テクスト相互連関性の考え方に示されるような複数のテクスト間の対話、またアナグラムなどによる多声性の奪回などがその具体的な操作として考えられている（丸山（1993：85-87））。鈴木（1999c）および本稿においては、そのような操作を経ることのない見かけ上通常の言葉と変わることのないものであったとしても、「言葉で言い表せない」体験における言葉の表出とは上記のような絶えず生成しつつある流動性を持つ記号行為の一つであるとして、その考察に含めることを考えるものである。

着目することにより探っていこうと考えるものである。

2　前提とする考えおよび仮説

2.1　言葉のイメージの多重性

本稿では一つの言葉には言葉の持つ意味だけではなく、その音また書記の各側面のいずれもが関与することにより豊かな多重の“イメージ”[6]が形成されていると考える。また人がある一つの言葉を他の言葉と全く無関係に単独にとらえるとは考えない。一つの言葉はその言葉との何らかの関連を持つ他の様々な言葉との相互連関[7]の中でとらえられるとの考えに立つ。ここでは以上のような考えに従い本稿における前提となる考えを以下のように導く。

(1) 言葉のイメージの多重性および他の言葉との相互連関：
　ある一つの言葉には、言葉の持つ意味、音、書記の各側面が関与することにより豊かな多重のイメージが形成されている[8]。そのイメージの多重性は、その言葉との相互連関を持つ他の様々な言葉を一つの手がかりとして探ることができる。

2.2　「言葉で言い表せない」体験における“意味可能性”

以上のような前提に基づき、第1節に述べた言葉の非慣習的かつ流動的な“意味可能性”について考えるためここでは以下の(2)のような仮説を立てる。

(2)「言葉で言い表せない」体験における“意味可能性”：

---

[6] ここでの「イメージ」とは、言葉の記号的また非記号的ないずれの側面からも中立の、言葉の価値そのものの豊かな広がりを指して言うものである。これは外界からの実際の刺激がないにも関わらず心に思い浮かぶ光景や音など、心理学で言われるところの心的に想起される“像”のことを指すのではない。また言葉の「価値」の豊かな広がりとは単純に“＋－”の尺度に還元されるような“価値”のことを言うものではない。従ってこの「イメージ」とは、ある言葉に対して抱く「快⇄不快」「明⇄暗」「強⇄弱」など何らかの単純な尺度に還元されるような“印象”のことを指すのではない。

[7] ここでの「相互連関」とは言葉と言葉の１対１の直接の結び付きのみではなく他の言葉を媒介とした間接的な連関も含めて考えるものである。

[8] ただしこのような多重のイメージは文法的な概念を表す助詞などには観察されにくいと思われる。イメージの多重性の豊かな言葉とそうでない言葉とがあることについて、それらの区別あるいは連続性を明らかにしていくことは今後の課題となる。

ある一つの言葉の持つ豊かな多重のイメージが、その言葉が「言葉で言い表せない」体験において表出される時の、その言葉のその流動的な“意味可能性”を生み出すことを可能にする。

我々は時に、日常において既に意味の固定化してしまった言葉によっては言い表すことのできない強い感情的色彩を伴う体験に遭遇する。しかしそのような体験に際してもなお我々には、いわば万感の思いを込めて何らかの言葉を表出しその混沌とした内的体験の世界を新たに分節し出そうとする動きが生じる。その時表出される言葉には日常の言葉に見られる慣習化そして固定化した記号的な“意味”はなく、言葉の本質としての非記号的な流動性が見出されることになる。

しかしこの時我々が全く新しい音の連鎖を作り出すのではなく何らかの既成の音の連鎖を用いることになるのは、その音の連鎖を持つ言葉には、その時のその「言葉で言い表せない」内的体験の世界を分節し表出されるにふさわしい豊かな多重のイメージが重なり合っているからではないかと考える。

鈴木（印刷中）では言葉のイメージの多重性を探るため実際に言葉の連想を手がかりとした実験を行い、その概要と結果を示した。本稿ではその結果をもとに第4節において上記の仮説の検証を行う。

3　イメージの多重性との関連を有する考え

3.1　百科事典的な意味のとらえ方

本稿が前提とする言葉のイメージの多重性の考え方は Langacker（1987：63, 154-166）における言語表現の意味の百科事典的（encyclopedic）なとらえ方とも関連を有する。

（3）encyclopedic（Langacker（1991：548））：

Refers to the open-ended nature of meanings and the lack of any specific boundary between linguistic and extra-linguistic knowledge. Hence the meanings of linguistic expressions cannot be characterized by means of short, dictionary-type definitions.

即ち言語表現の意味とは限りない広がりを持つものであり、その意味の広がりにおいては言語的な知識と言語外的な知識との境界は明確に定めることがで

きない。よって言語表現の意味とは、通常辞書に記載されているような簡略な定義をもってしては特徴付けることのできない性質のものであるとされるものである。ただしそのような百科事典的な知識の中にも、ある言語表現の意味を特徴付けるにあたってはその中心性に関して連続的段階性（gradation）が見られるとされている（Langacker（1987：159））。

（4）意味規定の中心性に関与する要因（Langacker（1987：159-161）（　）内は引用者）：その意味規定が
　（a）conventional である度合い（ある個人だけでなく言語社会全体に共有される知識か）
　（b）generic である度合い（一般性の高い知識内容か）
　（c）intrinsic である度合い（その対象物のみを問題としてなされ得る意味規定か）
　（d）characteristic である度合い（その対象物独特の特徴を十分に表すか）

本稿ではこの中でも“conventional”である度合いの低い、ある言語表現の意味規定にとっては非中心的と考えられるような知識に目を向ける。そのような知識に従い重ね合わされるイメージは、その言葉が「言葉で言い表せない」体験において表出される時、慣習化・固定化された記号的な意味との隔たりの大きい新奇性の高い“意味可能性”を生み出すことになると考えられる。

3.2　知識体系のネットワークモデル

また Langacker（1987：161-166）はそのような百科事典的な意味構造を知識体系のネットワークモデルに結び付けてとらえている。例えば *cat* という言語表現の意味構造［CAT］に関わる意味規定は、全て“cat”という節点をアクセスポイントとする知識のネットワーク上において、その節点から他の節点へと結ばれる弧（arc）の形で表されることになる。ただし Langacker（1987：165-166）は［A］という節点をアクセスポイントとする表現の意味にある構造［X］が“直接”に関わっていると考えてよいのは、［A...X...］という構造がユニットとして確立されている場合であるとする。ユニットというのはその言語社会において十分に慣習化され、一つのまとまりとして固定化・定着化した構造のことである。構造［A...X...］がユニットとして確立されていなければ、構造［X］は［A］の百科事典的な特徴付けに関しては間接的にしか関わっていないことになる。

本稿ではこのような知識のネットワーク上において、むしろユニットとして確立されていない間接的な結び付きに着目する。そのように間接的に結び付けられた知識に従いある言葉に重ね合わされることになるイメージは、3.1節で見た“conventional”な度合いの低い知識により形成されるイメージと同様に、その言葉が「言葉で言い表せない」体験において表出される時、新奇性の高い“意味可能性”を生み出すことになると考えられる。このような新奇性の高い意味可能性については第5節にて考察する。

3.3 連合関係

また一つの言葉の多重のイメージの形成には言葉の持つ意味だけではなく、音、書記の各側面も関与していると考えられる。このことはソシュール（1972：175-177）（Saussure（1972：173-175））において言われる言葉の連合関係（rapport associatif）の考え方と関連を有するものである。

(5) 連合関係（rapport associatif）：
（ソシュール（1972：175-177）, Saussure（1972：173-175））
(a) 意味（シニフィエ）および表現（シニフィアン）の共通性に基づく関係
enseignement→enseigner, enseignons など（語幹が共通）
enseignement→armement, changement など（接尾辞が共通）
(b) 意味（シニフィエ）の共通性・類似性に基づく関係
enseignement→instruction, apprentissage, éducation など
(c) 表現（シニフィアン）の共通性に基づく関係 [9]
enseignement→clément, justement など

これに日本語の例をあてはめてみると例えば以下の(6)のような例が考えられることになる。これらの関係はいずれも言葉の豊かな多重のイメージの形成に関与すると考えられるものである。

---

[9] ただし表現（シニフィアン）の共通性に基づくフランス語の例は *Cours de Linguistique Générale.*（『一般言語学講義』）の編者達による加筆と考えられるものである（丸山（1981：100））。また立川（1993：63-64）はさらに表現（シニフィアン）の音的共通性のみに基づく関係（発音は同じだが綴りが違う）（enseignment→maman）、および表現（シニフィアン）の書記的共通性のみに基づく関係（綴りは同じだが発音が違う）（enseignment→aiment）の二つを付け加えることができるとしている。

(6) (5)の連合関係の日本語例：

(a) 意味（シニフィエ）および表現（シニフィアン）の共通性に基づく関係
教育→教授、教習（あるいは教え→教える、教えよう）など
教育→養育、保育など

(b) 意味（シニフィエ）の共通性・類似性に基づく関係
教育→指導、訓練、啓発、しつけなど

(c) 表現（シニフィアン）の共通性に基づく関係
教育→俳句、細工など（/kjooiku/→/haiku/ /saiku/）
教育→恐縮、驚愕など（/kjooiku/→/kjoosjuku/ /kjoogaku/）

4　仮説の検証

4.1　例①—「力」

鈴木（印刷中）では2.1節の(1)に示した前提に基づき実際に言葉の連想を手がかりとした実験を行い、その概要と結果を示した。各実験協力者に一つの言葉を選んでもらい、その言葉から連想される言葉を自由に記述してもらうという方法をとり、そこで連想された様々な言葉を見ることにより連想の中心となった言葉のイメージの多重性を探ることを試みたものである。ここではその実験の結果より3例を取り上げ検討を行い、2.2節の(2)に示した「言葉で言い表せない」体験における“意味可能性”に関しての仮説を検証する。まず以下に「力」という言葉が選択された例についてその連想の結果を示す[10]。

データ18　キーワード：力　連想された言葉の総数：134

力—つよい—強さ
力—結び付ける
力—踏み出す——歩—前進—たゆまず
力—エネルギー—高まり—好調
力—話す—声—細くない—よわくない
力—いきなり—突風—なぎ倒す
力—英雄
力—突破
力—ふつふつ—わき出る
力—信じる
力—望む—念じる—その通り
力—勇気—愛—涙
力—眠り—覚める
力—継続—真面目—努力
力—車—動く
力—ふりしぼる

[10] 以下データ番号は全30例の実験結果の通し番号である。

力—やぶる
力—ヒーロー
力—晴れ
力—近付く
力—動かす—人—人の群れ—感動
力—心の強さ—勇気—夢　実現—未来—今
力—太鼓—音—力強い
力—大地—北海道—行きたい
力—大きい—包みこむ—許す—愛情
力—はじける—若さ—勢い—風
力—しなやか—やわらかい—しなう
—柔軟
力—力！［同じ言葉を力を込めて繰り返したもの］
力—見る！—目を開ける—目を覚ます
力—見破る—看破する
力—作る—創る—つくる
力—目に見えない—心に愛をくれる
力—風—風力—発電—オランダ
力—気の力—見えない力—つよい——一番つよい
力—夏—輝き
力—切り開く—未来—明日—今日—今—瞬間—このとき

力—ふりおろす
力—たたく
力—五月晴れ
力—生きる—人生—山あり谷あり
力—馬—走る—たてがみ—ゆれる
—なびく
力—暴力—裁判
力—体の動き—ダンス
力—夢
力—大波—波頭
—のみこむ
力—打つ—テニス—スマッシュ
力—かつ！［喝］
力—勝つ—勝負—戦い
力—前向き—勇気
力—愛の力—お母さん—子供
力—生命—生命のしるし
力—もらう
力—光—太陽
力—花咲く
力—与える

「力」という言葉の持つ豊かな多重のイメージ即ちその豊かな価値の広がりは、その言葉から連想されるこれらの様々な言葉を見ることによりとらえることができる。この言葉の豊かな多重のイメージとは、これらの様々な言葉から抽出あるいは還元されるような性質のものではなく、これらの言葉が多重に重ね合わされることにより形成されているものと考えられる[11]。

例えば「力」という言葉に対しこのような多重のイメージを持つこの話者が「言葉で言い表せない」という何らかの感情的色彩を伴う強い体験に遭遇し、「力だ」「力を出せ」「力が欲しい」などの言葉がいわば万感の思いを込めて表

---

[11]「力」という言葉が日常慣習的に、例えば「他のものを動かすもとになるもの」という概念を示す記号として用いられているとする。するとこの言葉のそのような記号的な意味は、この例では例えば「動かす」「エネルギー」などのイメージとして重ね合わされているのを見ることができる。

出され、その複雑な混沌とした内的体験の世界が新たに分節される動きが生じたとする。するとその時表出される「力」という言葉は、見かけ上は何ら通常の言葉と変わるものではないが、我々の日常において慣習化そして固定化されある概念を指し示すようになった「記号」としての言葉ではない。またそれは、あらかじめ分節され存在する何ものかをうまく指し示すべく言葉に工夫を施したというものでもない。

その時表出される「力」という言葉は、例えばこの例に従うと「前進」「強さ」「エネルギーの高まり」「勇気」「目覚め」「切り開かれる未来」「突破」「生きる」「感動」「動かす」「しなやかさ」「夢」「勝負」「見破る」「創造」「目に見えない」「愛」「生命のしるし」などのイメージが互いに入り交じり、多重に重なり合うものとなっていると思われる。それは「力」という言葉の慣習化そして固定化した記号的な“意味”ではなく、「言葉で言い表せない」体験において表出される時の非慣習的かつ流動的な“意味可能性”と言えるものである。「力」という言葉が上記のような豊かな多重のイメージを持つものでなければ、それが「言葉で言い表せない」体験において表出される時、このような“意味可能性”が生み出されることにはならないと思われる。

4.2　例②—「生」(1)

またイメージの多重性を探る実験においては「生」という言葉が選択された例が2例見られた。以下にまずそのうちの1例の連想の結果を示す。

データ30　キーワード：生　連想された言葉総数：77

生—人—つながり—愛
生—つづく—永遠—回帰
　　—くりかえし
生—小さい—ちっぽけ
生—愛—いたわり
　　—やさしさ
　　—きびしい
生—輝き
生—始まり—終わり
生—家族—あたたかい
　　—家—つくる
　　—人
生—性—男性—つながり—組み合わせ
生—見つかる—見つける
生—ひとりひとり
生—大切
生—はじける—粒
生—現実—生きる
生—夢—抱く
生—悩み
生—生まれる
生—よろこび—哀しみ—いたわり
生—何？
生—見つかる—見つける
生—豊か—濃い—濃密
生—子供—笑顔

—女性—
生—迷う—考える—とまる
—すすむ
—悩む
生—見きわめる—選ぶ—捨てる
—すすむ
生—人—多い—たくさん—それぞれ

生—生きる
生—of your own—自分の—自身の
生—多様—いろいろ
生—すすむ
生—満たす—心
生—交わる—重なる
生—生まれる—愛情—父と母—子供

この「生」という言葉の豊かな多重のイメージは、そこから連想されるこれらの様々な言葉の姿に表されている。しかしこの例に見られる多重のイメージはこの話者においてのものであり、異なる話者においてはこの「生」という言葉にもまた異なる多重のイメージが現れることになる。

「生」という言葉に対し上記のような多重のイメージを持つ話者が例えば「言葉で言い表せない」何らかの強く深い体験に遭遇した時、「生を貫く」「生を見つめる」「生を受け止める」などの言葉がいわば万感の思いをもって表出され、その内的体験の世界が新たに分節される動きが生じたとする。するとその「言い表すことのできない」体験において表出される「生」という言葉は、例えばこの例に従えば「愛」「夢」「現実」「悩み」「輝き」「喜び」「哀しみ」「豊か」「濃密」「人」「つながり」「発見」「永遠」「繰り返し」「始まり」「迷う」「きびしい」「選ぶ」「すすむ」「満たす」「交わり」「重なる」「何？」「見つける」などのイメージが、流動的に多重に重なり合うものとなっていると思われる。それはこの「生」という言葉の慣習化そして固定化した記号的な“意味”ではない。「生」という言葉の持つ上記のような豊かな多重のイメージが、そのような「言葉で言い表せない」体験において表出される時のその「生」という言葉の、非慣習的かつ流動的な“意味可能性”を生み出すことになると考えられる。

4.3 例③—「生」(2)

同じく「生」という言葉が選択されたもう1例の結果を示す。

データ28　キーワード：生　連想された言葉総数：88
生—生活—住む—探す—居つく—息をつく
—食べる—働く—金をもらう—物を買う
—衣—見栄—ファッション［ファッション］—飾る—虚栄心
生—りんじょう感—スポーツ—勝敗

—応援—青春—1時期のもの
生—アルバム—思い出—過去—傷—いやし
—未来—夢—希望—現実
生—老化—自身の変化—肉体的—成熟—はりのなさ—枯れる
—精神的—成熟—は気のなさ
—分別・知識
—成長しつづける—悟り？
生—解放感—ベルリン—自由—鳥—空—宇宙—無限
——一人ぐらし—電話—いたずらでんわ
生—無常観—移りかわり—時代—価置感［価値観］—
生—苦しみ—病気—限界を知ること
—親しい人の死—無力感—生きる意義の探求
生—歌う—美空ひばり—カリスマ—人々の希望
生—恋—恋人—愛情—結婚—老化—同居
—離婚
—冷め—別れ
生—遊ぶ—友だち—心を許す—いこい
生—考える—悩む—成長する　　生—時間—有限
生—死—無—宇宙—無限　　生—たまご［“生(なま)たまご”という連想］

ここでは4.2節に示した例とはまた異なる「生」という言葉の多重のイメージを見ることができる。

「生」という言葉に対しこのような多重のイメージを持つ話者が「言葉で言い表せない」という何らかの感情的色彩を伴う強い体験に遭遇した時、4.2節にて考えたのと同じく例えば「生を貫く」「生を見つめる」「生を受け止める」あるいは「生を受ける」「生と死」「生と詩」「生と歌」などの言葉がいわば万感の思いをもって表出され、その内的体験の世界が新たに分節される動きが生じたとする。するとその時に表出されるその「生」という言葉は、我々の日常において意味の固定化した「記号」としての言葉ではなく、この例に従えば例えば「生活」「虚栄心」「思い出」「過去」「傷」「老化」「変化」「分別」「精神」「肉体」「死」「無」「解放」「自由」「無常」「青春」「苦しみ」「限界」「無力感」「病気」「恋」「冷め」「別れ」「歌う」「希望」「現実」などのイメージが揺れ動き、重なり合うものとなっていると思われる。それは「生」という言葉が「言葉で言い表せない」体験において表出される時の、その流動的な“意味可能性”と言えるものである。

「生」という言葉が上記のような豊かな多重のイメージを持つものでなければ、日常の記号としての言葉によっては言い表すことのできない強くまた深い体験に遭遇した時、この「生」という言葉が表出されその複雑な内的体験の世界が新たに分節されることにはならないであろう。

5　新奇性の高い意味可能性

5.1　慣習性の度合いの低いイメージ

また一つの言葉の多重のイメージの中には、慣習性の度合いの低い知識により形成されるイメージもある。そのようなイメージはその言葉が「言葉で言い表せない」体験において表出される時、特に新奇性の高い意味可能性を生み出すことになると考えられる。

例えば以下の例(7)～例(14)に示したように、ある言葉をめぐりその話者自身の独自の考え方や信念などを反映したイメージが見られることがある。このようなイメージはその言語社会全体の共有度という観点から見れば、比較的慣習性の度合いの低い知識により形成されるイメージであると言える。しかしそのようなイメージはその言葉が「言葉で言い表せない」体験において表出される動きが生じた場合には、その時新たに分節される意味可能性に個人的色彩の強い独特のニュアンスを与えることになる可能性があると思われる。以下イメージの多重性を探るキーワードとなった言葉に下線を付し、実験後のインタビューを踏まえ再構築したその話者自身の考え方を［　］内に示す。

(7) データ5：距離―影―追いつかない―夢と現実
［自分の影より先に行くことはできない。よって影との間には常に一定の距離がある。］

(8) データ6：言葉―うっとうしい―やっかい―省略
［話すのは時にうっとうしく、やっかいに感じられるため省略してしまう。］

(9) データ18：力―晴れ
［晴れた時というのは力がみなぎっている感じがする。］

(10) データ18：力―見る！―目を開ける―目を覚ます
［力がないと物事から目をそらす、見ようとしない、逃げる。］

(11) データ23：季節―変化―転換―焦り―うつ病―
［季節が巡り周囲のものがどんどん変化し進んで行っている時、自分だ

けが変わっていないことに焦りが出てきて鬱状態になる。]

(12) データ28：生—りんじょう感［臨場感］—スポーツ—勝敗
[“生”とは“今そこで起こっている”“live”ということである。]

(13) データ29：時—透明—とける—消える
[時は目に見えない。水のイメージである。未来も過去ももやもやっとしてわからない。]

(14) データ29：時—長い—短い—楽しい—味わう—色
[楽しい時間は速く過ぎるので短く感じられる。そのような時間は透明ではなく色がついている。]

例えば例(7)の話者にとって「距離」という言葉は、「影」というイメージをその多重のイメージの中に含むものとなっている。自分と影との間に常に一定の距離があるということから、この「距離」という言葉に重ね合わされることとなった「影」というイメージは、言語社会全体の共有度という観点から見ればそれほど慣習性の高いものであるとは言い切れず、比較的この話者独自の考え方に基づくイメージであると考えられる。しかしそれ故に、何らかの「言葉で言い表せない」体験においてこの話者がこの「距離」という言葉を表出する動きが生じると、その時新たに生み出される意味可能性にはその「影」というイメージも重ね合わされ、比較的個人的色彩の強い独特のニュアンスが生み出されることになるだろうと思われる。

また例えば例(8)の話者が何らかの「言葉で言い表せない」強い体験において「言葉」という言葉を表出することが生じたとする。するとその時のその「言葉」という言葉には、この話者が持つ様々なイメージの一つとして「うっとうしい」「やっかい」などのイメージも重なり合う可能性があり、比較的個人的色彩の強い独特のニュアンスが与えられることになると思われる。
また例(11)の話者が何らかの感情的色彩を伴う「言葉で言い表せない」強い体験に遭遇した時、例えばこの例に見られる「季節」という言葉が表出される動きが生じたとする。するとその時その「季節」という言葉は、この例に見られるような「変化」「転換」「焦り」「鬱病」などの比較的個人的色彩の強い独特のイメージが流動的に重なり合うものとなる可能性が考えられる。

5.2　間接的に形成されるイメージ

また一つの言葉の多重のイメージの中には、以下の例(15)～例(20)に示すようにその言葉のイメージの多重性の形成に比較的間接的な形で関わっていると考えられるものも見られる。そのようなイメージは我々の知識のネットワーク

上においては間接的に結び付けられた知識により形成されるイメージである。しかしそのようなイメージはその言葉が「言葉で言い表せない」体験において表出される動きが生じた場合には、その時新たに分節される意味可能性に意外性の高いニュアンスを与えることになるだろうと思われるものである。以下イメージの多重性を探るキーワードとなった言葉に下線を付し、その言葉のイメージの多重性の形成に間接的な形で関与すると考えられるものについては、それを表すと考えられる言葉に二重下線を付す。また実験後のインタビューを踏まえた解釈を［　］内に示す。

(15) データ7：四—火星—アンタレス—心臓
［太陽系の4番目の惑星は火星である。「火星と敵対するもの」という意味の名前を持つ蠍座の“アンタレス”は蠍座の心臓の部分をなす星である。］

(16) データ23：季節—気候—四季—記憶—層—つみ重なる—つもる—荷物—重い
［季節が巡って来るごとに記憶の層が積み重なり、それが荷物になって重い。］

(17) データ24：自然—流れる—変わること—不安
［自然体でいるということは流され変わっていくことである。当たり前だと思っていることもそのように変わっていく可能性があると考えるとふと不安になる。］

(18) データ26：花—ゆうが—ゆとり—リラックス—うらやましい—暗い
［花が飾ってあると優雅でゆとりが感じられる。今の自分はそのようなリラックスした状態になく暗い。］

(19) データ28：生—歌う—美空ひばり—カリスマ—人々の希望
［「生きることは歌うこと」という名言を残し、昭和の人々の生きる希望のもととなったとも言えるカリスマ的な歌手がいた。］

(20) データ29：時—経験—蓄積—たまる—荷物
［時が経つとともに経験が蓄積し荷物になり、うっとうしい。］

例えば例(15)の話者にとって「四」という言葉には、上記に示した言葉の連想から見られるように「火星」「アンタレス」「心臓」などのイメージが重なり合ったものとなっていると思われる。この場合「四」という言葉に比較的直接的に関与していると思われるイメージは「火星」である。さらにそこから「(『火星と敵対するもの』という意味の) アンタレス」そしてさらに「(アンタ

レスが位置する蠍座の）心臓」というイメージが重ね合わされることになっている。それらのイメージは「四」という言葉に対してはそれぞれ「火星」「アンタレス」を介して比較的間接的に関わっているイメージである。しかしこの話者が何らかの言葉で言い表せない強い体験に遭遇しこの「四」という言葉が表出される動きが生じた時、その時その「四」という言葉には、他の様々なイメージと共にこの「火星」のみではなく「アンタレス」「心臓」などのイメージも重なり合うことになる可能性が考えられる。その時その「四」という言葉の新たな意味可能性には、比較的意外性の高いニュアンスが与えられることになると思われる。

また例えば例(17)の話者において「自然」という言葉には「流れる」「変わること」「不安」などイメージが重なり合ったものとなっていると思われる。この場合この「自然」という言葉の比較的直接的に形成されたイメージはそれが「流れ変わっていく」ということであると思われる。さらにそのことに対し「不安」であるとするのは、「自然」という言葉に対しその「流れ変わっていく」ことを介して比較的間接的に関わるイメージであると考えられる。しかしこの話者が言葉で言い表せない何らかの強い体験に遭遇しこの「自然」という言葉を表出する動きが生じた時、その時新たに生み出されるその言葉の流動的な揺れ動く意味可能性には、この「不安」というイメージも重ね合わされ比較的意外性の高いニュアンスが与えられる可能性もある。

6　その他に観察される点

本稿では「言葉で言い表せない」という体験においてなお表出される言葉の非慣習的かつ流動的な“意味可能性”がどのようなものとなるのかを、言葉のイメージの多重性の観点から探ることを試みたものである。

鈴木（印刷中）に示した実験の結果からはその他にも、言葉の意味的側面だけでなく音的および書記的側面も関与していると考えられるイメージとして、例えば「生」に対して「性」、「力」に対する「勝つ」というイメージと同時に「かつ！［喝］」というイメージ、また漢字表記された「生（せい）」に対して「たまご」というイメージ（“生（なま）たまご”）などの例が観察された[12]。また「老（ろう）」（老いる

[12] イメージの多重性を探るキーワードに対し他の言葉を媒介として間接的に結び付けられた言葉を含めれば、言葉の音的そして書記的側面が関与し形成されていると思われるイメージの例は他にも観察された。

いう意味）「静（せい）」（静かという意味）「悲（かな(しい)）」（悲しいという意味）などの漢字一文字により重ね合わされるイメージがあることも観察された[13]。またある一つの言葉の多重のイメージにおいて、相反するイメージが形成されている場合や繰り返し現れるイメージがあることなども観察された。そのようなイメージはいずれもその言葉が「言葉で言い表せない」体験において表出される動きが生じた時、その流動的な“意味可能性”に重なり合わされていくことになるものと思われる。

引用文献

鈴木智美（1998a）　「『～てしまう』の意味」『日本語教育』97号　pp.48-59

鈴木智美（1998b）　「日本語研究における『モダリティ』論の問題点―モダリティは『主観的』な意味要素か―」『ことばの科学』第11号　名古屋大学言語文化部　pp.243-256

鈴木智美（1999a）　「現代日本語研究におけるモダリティ論から丸山圭三郎のランガージュ論へ―話者の内面と言葉との関係を探るための視点の転換―」（日本記号学会札幌大会（第19回大会）における口頭発表およびハンドアウト）　於札幌大学

鈴木智美（1999b）　「言葉を取りまく言葉―言葉のイメージの多重性を探る―」（第2回認知言語学フォーラムにおける口頭発表およびハンドアウト）　於京都大学大学院人間環境学研究科

鈴木智美（1999c）　「言葉の記号性と非記号性―話者の内的体験と言葉との関わりを考えるための視点として―」『ことばの科学』第12号　名古屋大学言語文化部　pp.145-170

鈴木智美（印刷中）　「言葉を取りまく言葉―連想を手がかりとして言葉のイメージの多重性を探る―」『名古屋大学人文科学研究』第29号　名古屋大学大学院文学研究科

フェルディナン・ド・ソシュール（1972）　『一般言語学講義』　小林英夫（訳）　岩波書店（初版 1940年）

立川健二（1993）　「言語学、言語哲学、文学」　加賀野井秀一・前田英樹・立川健二（編）『言語哲学の地平―丸山圭三郎の世界―』　夏目書

[13] このことには、このイメージの多重性を探る実験が口頭ではなく筆記方式をとってなされたことも関与していると思われる。

房　pp.52-66
丸山圭三郎（1981）　『ソシュールの思想』　岩波書店
丸山圭三郎（1983）　『ソシュールを読む』　岩波セミナーブックス2
丸山圭三郎（1984）　『文化のフェティシズム』　勁草書房
丸山圭三郎（1993）　『〈増補完全版〉文化記号学の可能性』　夏目書房（初版 日本放送出版協会 1983年）
Langacker, Ronald W. 1987-91. *Foundations of Cognitive Grammar.* 2 vols. Stanford: Stanford University Press.
Saussure, Ferdinand de. 1916. *Cours de Linguistique Générale.* Publié par Charles Bally et Albert Sechehaye avec la Collaboration de Albert Riedlinger, Paris: Payot. Éition Critique Préparée par Tullio de Mauro, Paris: Payot, 1972.